



湧き出でよ人材

創立100周年記念碑より

今月のテーマ
出合い

本部町立伊豆味小中学校

No.3
R8.5.25
発行

学校だより

文責 校長 伊波 勉

「心肺蘇生法講習」胸部圧迫とAEDの使用方法



5月19日(火)に、小学5・6年生と全中学生を対象に、心肺蘇生法の講習会を実施しました。講師は、中部徳洲会病院の曾根さんと長浜さんです。お二人にご指導いただくのは今年で3年連続となります。

救命教育に詳しい曾根さんは、心肺蘇生法(CPR)先進国であるデンマークの例を紹介しながら、「毎年学ぶこ



仲村さん、曾根さん



とに大きな意味がある」とお話ししてくださいました。デンマークでは、学校教育や運転免許取得時にCPR講習が取り入れられており、市民による初期対応率が大きく向上したことで、心停止患者の生存率も大幅に高まっているそうです。また、心肺蘇生法を毎年学ぶ最大の意義は、「救命の知識や技術を忘れないこと」と、「いざという時に迷わず行動できる自信を育てること」にあるとも教えていただきました。人は時間が経つと、どうしても記憶や技術が薄れていきます。そのため、繰り返し学び、体験することがとても大切なのだそうです。

今回の学習を通して、子どもたちには、いざという時に大切な家族や友達、周囲の人の命を守るために、自分から勇気をもって行動できる人に育ってほしいと願っています。

5月11日には、小学校全学年で校庭に実ったタイワンコウメを収穫しました。そして5月21日には、3・4年生が梅シロップづくりに挑戦しました。

講師は、今年も用務員の安田先生です。活動のはじめ

に安田先生は、昨年収穫した梅で作った「梅干し」や「梅シロップ」を子どもたちに紹介しました。小瓶に入った梅シロップや、お皿に並べられた梅干しを見た子どもたちからは、「すっぱいにおいがする」「大きくなっている」など、素直で楽しい感想が聞かれました。「今年もおいしく作るぞ!」とやる気いっぱいの子供たちは、終始笑顔で梅シロップづくりに取り組んでいました。



また、安田先生のお話では、梅干しと一緒に漬けられている赤じそも、校庭に自生しているものだそうです。子どもたちは、学校の自然が食べ物へと変わっていくことに驚きながら、興味深そうに話を聞いていました。

このような活動は、地域や学校の自然に親しみながら、季節の恵みや昔から受け継がれてきた暮らしの知恵を学ぶ貴重な機会です。総合的な学習の時間を通して、自分たちの身近な環境に目を向け、体験を通して学ぶことは、子どもたちの豊かな感性や探究心を育てることにつながっています。

「梅シロップ」づくり



令和8年度「生徒総会」のなかから、質疑:「(通学方法について)自転車通学も選択肢に入れるのはどうか?」について紹介します。生徒会執行部の回答:昨年度も議案に上がり、結果実現は不可能だというまとめになった。

①安全面の課題 現在でも「自転車の乗り方が危ない」という地域からの指摘があり、生徒指導が行われることがあります。並進、スピードの出しすぎ、一時停止不足など、交通ルールやマナーの徹底が課題となっています。

②管理面の課題 自転車通学を認める場合、自転車保険への加入確認が必要になります。しかし、住民登録は校区内だが、実際は校区外から登校している生徒について、保険適用が法的に問題なく認められるのかという確認が必要になります。他市町村から通学している生徒も多くいますが、その場合は通学距離がかなり長くなります。学校として、どこまでを自転車通学の対象とするかという基準づくりも課題です。事故やトラブルが起きた場合の学校・保護者・教育委員会の責任範囲についても整理が必要です。

③地域や本部警察署、保護者の意向 地域の方から「道路事情を考えると危険ではないか」という心配の声があります。本部警察署からも、安全確保や交通ルール指導の重要性について意見があります。生徒の利便性だけでなく、安全面、法的な確認、地域からの信頼などを総合的に考えて判断する必要があります。